

シュタイナーの一元論

西井 美穂

広島大学大学院 総合科学研究科 研究員

1. ルドルフ・シュタイナーとその思想

ルドルフ・シュタイナー (Rudolf Steiner, 1861-1925) はシュタイナー教育の創設者として知られている。知性教育に対する情操教育として、また個性を尊重した自由教育を実践している学校として、年々その理念は世界に広く理解されつつある。

しかし、このような増加傾向にある一方で、現実の大学入試制度や社会生活に適応するのではなく、自らの意志の自由を尊重するという独自性を貫くことを理念としているため、どのように社会と折り合いをつけるかをめぐり、国家との制度的障害に直面しているという。

日本においては、従来の教育へのアンチテーゼとして受容されたシュタイナー教育であるが、ドイツでは1980年頃から、経験的実証的な従来の学問としての教育学とは対立するシュタイナー教育への批判的議論が始まっていた¹。多くの教育学者は「非科学的」²であると見做している。

このように、日本とドイツでは、対照的であるようにみえるシュタイナー教育の現状であるが、その背後にある思想に目を向けたとき、日本においてもドイツにおいても同じ問題が浮かび上がってくる。すなわち、ドイツの教育学において経験的実証的でない方法によるものは「非科学的」であると見做されていることと同様に、日本においてもその思想は、神秘主義故に「思想史における位置付けすら不十分」³というのが現状であった。

そうした現状において、シュタイナーの初期の著作のドイツ観念論と結びつく『自由の哲学 (*Die Philosophie der Freiheit*)』などは、これまでその重要性が指摘されながらも思索の対象にはされてこなかった。

しかし、近年、シュタイナーの初期の哲学的思想が注目され始めてきた⁴。シュタイナーの思想がどのような方向性をもつかを見極めるためには、彼の神秘思想のみならず、初期の哲学的思索が十分に吟味されることが必要であると考えられる。

本発表は、『自由の哲学』の中の「全一的存在」をキーワードとして、その一元論を考察することで、シュタイナー思想の初期の哲学的思想を、後の神秘主義思想の基盤として位置づける試みである。

2. ゲーテの自然認識と「全一的存在」としての人間

『自由の哲学』によれば、空間、時間に制約された「主観的な仕組みに影響をうけている知覚領域」と「宇宙(世界)の全体と関わる概念領域」を融合させ、人間の認識において主観的なものと客観的なものを結びつけた世界観が「一元的な世界観 (*eine*

¹ Ernst-Michael Kranich, Lorenzo Ravagli, *Waldolfpädagogik in der Diskussion – eine Analyse erziehungswissenschaftlicher Kritik* –, Verlag Freies Geistesleben, Stuttgart, 1990, S. 7, 60.

² 同論文、102頁。

³ 西平直『シュタイナー入門』、12–13頁。この指摘は神智学の研究者である神尾にも指摘されている(『人間理解の基礎としての神智学』(神尾学著、コスモス・ライブラリー、2006年)。

⁴ 例えば、シュタイナー初期の哲学的著作を分析した論文では、次のようなものがある。河野桃子「前後期シュタイナーを貫く『世界自己』としての『私』という観点——シュタイナーのシュティルナー解釈に見られる倫理観に注目して——」、教育哲学学会『教育哲学研究』104号、2011年、77頁–95頁。野口孝之「シュタイナーの初期哲学」、東京大学宗教研究室『東京大学宗教学年報XXVIII』159頁–176頁、2011年。

monistische Weltanschauung)」⁵である。それはまた、「物質と精神の両本性が結合されていると考える立場」⁶であり、「一面的な実在論を観念論と結びつけて、高次の統一体 (eine höhere Einheit) にする」⁷ことであった。そうすることで人間は、「全一的存在 (all-eine Wesen)」⁸になるという。

西洋に伝統的な二元論をシュタイナーは批判したが、二元論そのものを批判したのではなかった。二元論は人間が対象を認識する場合、初期段階で通過しなければならない過程であった。人間が対象を認識する過程で世界は必ず二元化される。シュタイナーにとっての問題は、それを統一させることにあった。しかし、近代においてカント的な認識論は、その統一の可能性を否定してしまうおそれがあるとシュタイナーは考えたのである。

その統一の鍵となるのが理念界と結びつく「直観」である。「直観」による主観と「宇宙の全体と関わる概念領域」とを融合したものは、人間において分裂と統一を繰り返すゲーテ的な生命の「メタモルフォーゼ (Metamorphose)」と見做された。

ゲーテの自然認識の方法は、通常自然科学的方法のような、自然現象から抽象的な原理を導き出すというものではなかった。ゲーテは、自然を物質とも精神とも考え、自然を観察することで、精神的なものである「上昇 (Steigerung)」する現象の中の理念を直接知覚した。この理念の直接知覚とは、自然観察を通して理念が自己の内奥で「直観」となり、対象の「メタモルフォーゼ」する「生きた理念 (die lebendige Idee)」⁹を感得するというものであった。

3. 「全一的存在」における「愛」

こうした、ゲーテの自然認識の方法を、シュタイナーは人間精神を観照することに応用したのであるが、彼は人間において、感覚的世界と精神的世界を結びつけるものが「愛 (Liebe)」であると考えた。

『自由の哲学』においては「思考」を重視し、「思考」は物質と精神に二元化された人間を統一し「全一的存在」にすると考えていたシュタイナーであるが、人間が「全一的存在」になるのは、認識が、個人的な知覚内容や性格などが影響し得ない最終段階にまで発展しなければならなかった。そうした高度の認識を獲得するには、「知性 (Verstand)」ではなく、「愛 (Liebe)」が重要な鍵を握るという。

この「愛」は、『自由の哲学』から約 10 年後に著された『神秘的事実としてのキリスト教と古代の秘儀 (Das Christentum als mystische Tatsache und die Mysterien des Altertums)』において、「叡智を受け取るまえの心魂の力」¹⁰、母性の原理とされている。

人間を主体的にするのは快を根底におく「愛」であり、「愛」が意志を含め理念界からくる真善美の要素を引き寄せると考えた。シュタイナーは感情である「愛」が人間の個性に属していると理解していたが、人間が普遍へと結びつくには、「愛」はなくてはならない存在だと見做していた。

以上、本発表では、シュタイナーの人間の認識と存在における一元論の構造と、その一元的統一を可能にする、「愛」について論じたい。

⁵ Rudolf Steiner, *Die Philosophie der Freiheit*, Rudolf Steiner Verlag, Dornach, 2005 (15. Aufl.), S. 96. シュタイナー『自由の哲学』高橋巖訳、筑摩書房、2002年、134頁。

⁶ ebd., S. 28. 同書、46頁。

⁷ ebd., S. 104. 同書、144頁。

⁸ ebd., S. 31, 34. 同書、109頁。

⁹ ebd., S. 206.

¹⁰ Rudolf Steiner, *Das Christentum als mystische Tatsache und die Mysterien des Altertums*, Rudolf Steiner Verlag, Dornach, 2002 (9. Aufl.), S. 71. シュタイナー『神秘的事実としてのキリスト教と古代の秘儀』西川隆範訳、アルテ、2003年、76頁。